



# Solaris™ Security Toolkit 4.2 ご使用にあたって

---

Sun Microsystems, Inc.  
[www.sun.com](http://www.sun.com)

Part No. 819-3796-10  
2005 年 7 月, Revision A

コメントの送付: <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている技術に関する知的所有権を有しています。これら知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付属する製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品のフォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリュウミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun, Sun Microsystems, Java, AnswerBook2, docs.sun.com は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。サンロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights—Commercial use. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植の可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Solairs Security Toolkit 4.2 Release Notes  
Part No: 819-1504-10  
Revision A



Please  
Recycle



Adobe PostScript

# 目次

---

はじめに	vii
Solaris Security Toolkit 4.2 ご使用にあたって	1
Solaris Security Toolkit 4.2 リリースの変更点	1
Solaris 10 OS サポートの変更点	2
一般的な変更点	3
Solaris 10 OS サポートの詳細	4
Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しいフレームワーク関数	4
Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しいスクリプト	5
Solaris 10 OS では使用されないスクリプト	6
Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しい環境変数	6
新しいフレームワーク変数	6
新しいスクリプト動作変数	7
Solaris 10 OS では使用されない環境変数	7
Solaris Security Toolkit 4.2 リリースから削除された機能	7
自動的に無効化される <code>rpcbind</code>	8
▼ <code>rpcbind</code> を有効にする	8
サポートされるハードウェアシステム	9
サポートされる Solaris OS のバージョン	9
サポートされる SMS のバージョン	10

Solaris Security Toolkit 4.2 で既知の制限事項 10

一般的な問題 11

パッケージ形式でのみ配布されるリリース 11

SUNWjass および JASScustm パッケージが再配置可能になる 11

Solaris Security Toolkit と CTRL-C キー操作 11

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアのバグ 11

NIS を使用しているときに、再起動を複数回行うと監査エラーが生じる場合がある (Bug ID 6222181) 12

再起動を複数回行うと `svcs` が初期化されず、`nddconfig` で監査が失敗する (Bug ID 6284872) 12

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアに影響するバグ 13

`ip6_send_redirects` のパラメータが監査によって異なる場合がある (Bug ID 6222001) 13

`/etc/motd` は揮発性ファイルとしてインストールする必要がある (Bug ID 6222495) 13

`svc.startd` が `optional_all` のエッジケースを見つけることができない (Bug ID 6223370) 14

# 表目次

---

表 1	Solaris 10 OS では使用されない Solaris Security Toolkit スクリプト	6
表 2	SunOS と Solaris OS のバージョンの相関関係	9



# はじめに

---

本書には、Solaris™ Security Toolkit 4.2 ソフトウェアのリリース情報を記載していません。

---

## お読みになる前に

本書は、UNIX® システム、特に Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) での作業経験を持つ Solaris システム管理者を対象にしています。このような経験がない場合は、Solaris ユーザーおよびシステム管理者向けマニュアルを読み、UNIX システム管理のトレーニングの受講を検討してください。

---

## UNIX コマンド

本書には、システムの停止、システムの起動、およびデバイスの構成などに使用する基本的な UNIX® コマンドと操作手順に関する説明は含まれていない可能性があります。これらについては、以下を参照してください。

- 使用しているシステムに付属のソフトウェアマニュアル
- 下記にある Solaris™ オペレーティングシステムのマニュアル

<http://docs.sun.com>

---

## シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX の C シェル	<i>machine_name%</i>
UNIX の Bourne シェルと Korn シェル	\$
スーパーユーザー (シェルの種類を問わない)	#

---

## 書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	<b>マシン名% su</b> Password:
<i>AaBbCc123</i>	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% <b>grep</b> `^#define \ XV_VERSION_STRING`

\* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。



---

## 関連マニュアル

オンラインのマニュアルは次の URL で参照できます。

[http://www.sun.com/products-n-solutions/hardware/docs/Software/enterprise\\_computing/systems\\_management/sst/index.html](http://www.sun.com/products-n-solutions/hardware/docs/Software/enterprise_computing/systems_management/sst/index.html)

用途	タイトル	Part No	形式	場所
参照	Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル	819-3793-10	PDF HTML	オンライン
管理	Solaris Security Toolkit 4.2 管理マニュアル	819-3789-10	PDF HTML	オンライン
マニュアルページ	Solaris Security Toolkit 4.2 マニュアルページガイド	819-3794-10	PDF	オンライン

---

## マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	URL	説明
マニュアル	<a href="http://jp.sun.com/documentation/">http://jp.sun.com/documentation/</a>	PDF と HTML マニュアルをダウンロードする、印刷マニュアルを注文する
サポートおよびトレーニング	<a href="http://jp.sun.com/supporttraining/">http://jp.sun.com/supporttraining/</a>	テクニカルサポートを受ける、パッチをダウンロードする、Sun のコースについて情報を入手する

---

## Sun 以外の Web サイト

本書で紹介する Sun 以外の Web サイトが使用可能かどうかについては、Sun は責任を負いません。このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、広告、製品、またはその他の資料についても、Sun は保証しておらず、法的責任を負いません。また、このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、商品、サービスの使用や、それらへの依存に関連して発生した実際の損害や損失、またはその申し立てについても、Sun は一切の責任を負いません。

---

## コメントをお寄せください

マニュアルの品質改善のため、お客様からのご意見およびご要望をお待ちしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルと Part No. を記載してください。

『Solaris Security Toolkit 4.2 ご使用にあたって』、part number 819-3796-10

# Solaris Security Toolkit 4.2 ご使用にあたって

---

本書では、JASS (JumpStart™ Architecture and Security Scripts) と呼ばれる Solaris™ Security Toolkit ソフトウェア 4.2 リリースのリリース情報として、次の項目について説明します。

- Solaris Security Toolkit 4.2 リリースの変更点
- Solaris 10 OS サポートの詳細
- サポートされるハードウェアシステム
- サポートされる Solaris OS のバージョン
- サポートされる SMS のバージョン
- Solaris Security Toolkit 4.2 で既知の制限事項
- 一般的な問題
- Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアのバグ
- Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアに影響するバグ

---

## Solaris Security Toolkit 4.2 リリースの変更点

リリース情報のこの節では、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアリリースに対して加えられた主な変更点を説明します。これらの変更点の詳細については、『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』を参照してください。

---

注 – Solaris Security Toolkit ソフトウェアの以前のリリースで Documentation ディレクトリにあった CHANGES ファイルは、このリリースでは、なくなりました。その代わりに、変更点は本書に記載されています。

---

## Solaris 10 OS サポートの変更点

この Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアリリースは Solaris 10 オペレーティングシステム (OS) をサポートしています。

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアを使用すると、以前のバージョンと同じような方法でシステムのセキュリティーの強化および監査ができます。また、このリリースのソフトウェアは以前のバージョンと同じように、JumpStart モードとスタンドアロンモードのいずれかで使用できます。

Solaris 10 OS をサポートするためにこのリリースに加えられた主要な変更点を次に示します。詳細は、「Solaris 10 OS サポートの詳細」を参照してください。

- SMF 対応サービス - 多くの Solaris Security Toolkit スクリプトで、サービス管理機能 (SMF) サービスインタフェース、障害管理リソース識別子 (FMRI)、および起動/停止スクリプトを使用できるようにします。
- レガシーサービス - SMF で、SMF 対応ではない Solaris Security Toolkit スクリプトの一部をレガシーサービスとして認識できるようにします。
- ゾーン - Solaris 10 OS のゾーンを強化および監査できるようにします。
- TCP ラッパー - Solaris Security Toolkit ドライバ用の Transmission Control Protocol (TCP) ラッパー構成を提供します。
- MD5 - digest -a md5 コマンドを通じて Solaris 10 OS の message\_digest 5 (md5) アルゴリズム機能をサポートします。これにより、Solaris 10 OS システムでは SUNBEmd5 パッケージが不要になります。
- ルーティングの管理 - Solaris 10 OS においてルーティングを管理するための新しいスクリプトを提供します。
- 新しいホームルートディレクトリ - ルートディレクトリ用に、標準的な / の代わりに、新しいホームルートディレクトリ /root を提供します。
- IP フィルタ - フリーウェアのインターネットプロトコル (IP) フィルタを統合することにより、統合されたファイアウォール機能を提供します。
- BART - 基本監査報告機能 (BART) をサポートします。これにより、数ある機能の中でも特にシステム上で発生したファイルレベルの変更を判別できるようになります。
- 柔軟性のある Crypt - パスワード暗号化に使用されるアルゴリズムを制御する Solaris 10 OS のいくつかの新しいチューニング可能パラメータの使用をサポートします。
- アカунトのロック - 事前に定義された回数のログイン試行が失敗したあと、Solaris 10 OS がアカウントをロックする機能をサポートします。
- パラメータ化されたパスワードチェック - Solaris 10 OS の厳密なパスワードチェックをサポートします。
- パスワード履歴 - Solaris 10 OS に追加されたパスワード安全性チェックをサポートします。

- **RPC BIND - Remote Procedure Call from the Berkeley Internet Name Domain (rpcbind)** の無効化/有効化をサポートします。
- **Perl - Solaris 10 OS** とともに使用する、**Practical Extraction and Report Language (Perl)** での **Solaris Security Toolkit** スクリプトの作成をサポートします。
- **XFS - X Font Server** の無効化/有効化をサポートします。XFS クライアントはフォントセットを要求するためにサーバーに接続し、サーバーはディスクからフォントファイルを読み取り、クライアントに提供します。X Font Server デーモンは SMF により管理されます。
- **GNOME - 共通デスクトップ環境 (CDE)** と同じように、**GNU Network Object Model Environment (GNOME)** の無効化/有効化をサポートします。

## 一般的な変更点

Solaris 10 OS をサポートするためにこのリリースに対して加えられた変更以外にも、このリリースに対しては次の一般的な変更が加えられています。

- **再配置可能なパッケージ - 再配置可能な Solaris Security Toolkit 4.2** パッケージを提供することにより、`pkgadd` コマンドで正しいオプションを使用して、希望するどのディレクトリにでもパッケージをインストールできます。
- **バックアップファイルの削除 - Solaris Security Toolkit** バックアップファイルを削除することができます。
- **ドライバ機能の結合 - desktop-`{secure|config|hardening}.driver`、sunfire\_15k\_domain-`{secure|config|hardening}.driver`、および jumpstart-`{secure|config|hardening}.driver` の機能が server-`{secure|config|hardening}.driver` に組み込まれています。**
- **インテリジェントデフォルト - インテリジェントデフォルト、つまり可能な場合ユーザーが Return キーを押してデフォルトを指定できる機能をサポートしています。**
- **詳細レベル - jass-execute および jass-check-sum コマンドで詳細レベルを下げた出力をサポートしています。**
- **IIim - Solaris OS** ソフトウェアのアジア諸言語入力を処理する **Internet-Intranet Input Method (IIim)** の無効化/有効化をサポートします。
- **一貫性のある戻り値とヘルプ出力 - すべての Solaris Security Toolkit コマンドに対する、一貫性のある戻り値とヘルプ出力を提供します。**
- **Apache 2 - apache2** をサポートします。

---

# Solaris 10 OS サポートの詳細

次の節には、このリリースにおける Solaris 10 OS サポートの変更点の詳細が記載されています。

## Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しいフレームワーク関数

次の関数はこのリリースで新しく追加されたもので、Solaris 10 OS が動作するシステムでのみ使用できます。これらの関数は、『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 2 章で説明されています。

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアには、次の共通ログ関数が追加されました。

- `logNotGlobalZone`
- `logScore`
- `logScriptFailure`
- `logServiceDisabled` と `logServiceEnabled`
- `logServiceInstalled` と `logServiceNotInstalled`
- `logServiceOptionDisabled` と `logServiceOptionEnabled`
- `logServiceProcessList`
- `logServicePropDisabled` と `logServicePropEnabled`
- `logServiceRunning` と `logServiceNotRunning`
- `logUserLocked` と `logUserNotlocked`
- `logUndoBackupWarning`

Solaris Security 4.2 ソフトウェアには、次のさまざまな共通関数が追加されました。

- `get_driver_report`
- `get_lists_conjunction`
- `get_lists_disjunction`

Solaris Security Toolkit 4.2 フレームワークで SMF をサポートするために、次のパブリックドライバ関数が作成されました。

- `add_option_to_ftpd_property`
- `change_group`
- `change_mode`
- `change_owner`
- `check_serviceDisabled`
- `check_serviceEnabled`
- `check_serviceInstalled`
- `check_serviceNotInstalled`
- `check_serviceNotRunning`

- check\_serviceOptionEnabled
- check\_servicePropDisabled
- check\_serviceRunning
- check\_serviceOptionDisabled
- check\_userLocked
- check\_userNotLocked
- convert\_inetd\_service\_to\_fmri
- disable\_service
- enable\_service
- is\_service\_enabled
- is\_service\_installed
- is\_service\_running
- is\_user-account\_extant
- is\_user\_account\_locked
- is\_user\_account\_login\_not\_set
- lock\_user\_account
- make\_link
- set\_service\_property\_value
- set\_stored\_keyword\_val
- unlock\_user\_account
- update\_inetcon\_in\_upgrade

## Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しいスクリプト

次に、Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しい終了スクリプトおよび監査スクリプトを示します。終了 (.fin) スクリプトの機能は、『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 5 章で説明されています。監査 (.aud) スクリプトの機能は、『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 6 章で説明されています。

- disable-apache2.{fin|aud}
- disable-appserv.{fin|aud}
- disable-IIim.{fin|aud}
- disable-routing.{fin|aud}
- enable-account-lockout.{fin|aud}
- enable-bart.{fin|aud}
- enable-ipfilter.{fin|aud}
- enable-password-history.{fin|aud}
- set-root-home-dir.{fin|aud}
- set-strict-password-checks.{fin|aud}

## Solaris 10 OS では使用されないスクリプト

表 1 に、Solaris 10 OS を強化する際には使用しない Solaris Security Toolkit スクリプトの一覧を示します。

表 1 Solaris 10 OS では使用されない Solaris Security Toolkit スクリプト

スクリプト名	適用可能なオペレーティングシステム
disable-ab2	Solaris 2.5.1 ～ 8
disable-aspp	Solaris 2.5.1 ～ 8
disable-picld	Solaris 8 および 9
install-fix-modes	Solaris 2.5.1 ～ 9
install-newaliases	Solaris 2.5.1 ～ 8
install-openssh	Solaris 2.5.1 ～ 8
install-sadmin-options	Solaris 2.5.1 ～ 9
install-strong-permissions	Solaris 2.5.1 ～ 9
remove-unneeded-accounts	Solaris 2.5.1 ～ 9

## Solaris Security Toolkit 4.2 リリース用の新しい環境変数

この節では、このリリースで新しく追加され、Solaris 10 OS が動作するシステムでのみ使用できる、フレームワークおよびスクリプト動作環境変数の一覧を示します。環境変数の機能については、『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 7 章で説明されています。

### 新しいフレームワーク変数

- JASS\_DISPLAY\_HOST\_LENGTH
- JASS\_DISPLAY\_SCRIPT\_LENGTH
- JASS\_DISPLAY\_TIME\_LENGTH
- JASS\_FILE\_COPY\_KEYWORD
- JASS\_ROOT\_HOME\_DIR
- JASS\_RUN\_CLEAN\_LOG
- JASS\_RUN\_VALUES
- JASS\_SAVED\_BACKUP
- JASS\_SCRIPT
- JASS\_SCRIPT\_FAIL\_LOG
- JASS\_SCRIPT\_NOTE\_LOG



- JASS\_SCRIPT\_WARN\_LOG
- JASS\_UNDO\_TYPE

## 新しいスクリプト動作変数

- JASS\_CRYPT\_ALGORITHMS\_ALLOW
- JASS\_CRYPT\_ALGORITHMS\_DEFAULT
- JASS\_CRYPT\_DEFAULT
- JASS\_CRYPT\_FORCE\_EXPIRE
- JASS\_PASS\_DICTIONLIST
- JASS\_PASS\_DICTIONDBDIR
- JASS\_PASS\_HISTORY
- JASS\_PASS\_MAX\_REPEATS
- JASS\_PASS\_MIN\_ALPHA
- JASS\_PASS\_MINDIFF
- JASS\_PASS\_MINDIGIT
- JASS\_PASS\_MINLOWER
- JASS\_PASS\_MINNONALPHA
- JASS\_PASS\_MINSPECIAL
- JASS\_PASS\_MINUPPER
- JASS\_PASS\_NAMECHECK
- JASS\_PASS\_WHITESPACE
- JASS\_ZONE\_NAME

## Solaris 10 OS では使用されない環境変数

次の環境変数は、Solaris 10 OS では使用されません。

- JASS\_ISA\_CAPABILITY (Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアから削除)
- JASS\_DISABLE\_MODE

## Solaris Security Toolkit 4.2 リリースから削除された機能

次の機能に関連するファイルとスクリプトは、不要となったため、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアから削除されました。

- Sun Fire ハイエンドシステムのドメインへの misc/klmmod カーネルモジュールのインストール
- Sun ONE Web Server のインストール
- sunfire\_mf\_msp-{secure|config|hardening}.driver
- 32 ビット機能

- Sun Enterprise™ 1000 (Starfire™) (製品のサポート中止による)

## 自動的に無効化される rpcbind

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの `secure.driver` および `sunfire-15k_sc-secure.driver` は、以前のバージョンのツールキットと同様に `rpcbind` を無効にしました。しかし、Solaris 10 OS には、ネットワーク情報サービス (NIS) やネットワークファイルシステム (NFS) など `rpcbind` に依存するサービス、および共通デスクトップ環境 (CDE) や GNU Network Object Model Environment (GNOME) などのウィンドウマネージャがあります。デフォルトでは、`secure.driver` および `sunfire-15k_sc-secure.driver` の構成ではこれらのサービスが無効になるため、これらのサービスを使用するには `rpcbind` を有効にする必要があります。

---

注 - `server-secure.driver` および `suncluster3x-secure.driver` は `rpcbind` を無効にしません。

---

### ▼ `rpcbind` を有効にする

1. システムの強化を解除します。
2. `secure.driver` と `hardening.driver` を、それぞれ `new-secure.driver` と `new-hardening.driver` にコピーして名前を変更します。`new-secure.driver` は、新しくカスタマイズされた `secure.driver` に対してユーザーが選択した名前、`new-hardening.driver` は、新しくカスタマイズされた `hardening.driver` に対してユーザーが選択した名前です。
3. `new-secure.driver` を編集して、`hardening.driver` への参照を `new-hardening.driver` に置き換えます。
4. `new-hardening.driver` から `disable-rpc.fin` スクリプトをコメントアウトします。
5. `new-secure.driver` とともに Solaris Security Toolkit を実行することにより、カスタマイズされたコピードライバを使用して、強化を再度実行します。
6. システムを再起動します。



---

注意 - `rpcbind` サービスを有効にしたあと、追加のサービスが自動的に起動し、それに対応するポートが開く場合があります。Solaris Security Toolkit の監査は、これらの追加サービスを障害として警告します。

---

---

# サポートされるハードウェアシステム

Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアは、SPARC® (64 ビットのみ)、および x86 システムをサポートしています。

---

# サポートされる Solaris OS のバージョン

Sun では、Solaris Security Toolkit ソフトウェアを Solaris 8、Solaris 9、および Solaris 10 オペレーティングシステムで使用する場合にはのみサポートを提供しています。

---

**注** – Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの場合、Solaris 10 を使用できるのは Sun Fire ハイエンドドメイン上だけであり、システムコントローラ (SC) 上では使用できません。

---

Solaris Security Toolkit ソフトウェアは Solaris 2.5.1、Solaris 2.6、および Solaris 7 オペレーティングシステムで使用することもできますが、これらのオペレーティングシステムで使用する場合、Sun ではサポートを提供していません。

Solaris Security Toolkit ソフトウェアは、インストールされている Solaris オペレーティングシステムのバージョンを自動的に検出し、そのバージョンに合わせて適切なタスクを実行します。

本書全体の例では、スクリプトが OS のバージョンをチェックする場合、スクリプトは、Solaris OS のバージョンである 2.x、7、8、9、または 10 ではなく、SunOS™ のバージョンである 5.x をチェックします。表 2 に、SunOS と Solaris OS のバージョンの相関関係を示します。

表 2 SunOS と Solaris OS のバージョンの相関関係

SunOS のバージョン	Solaris OS のバージョン
5.5.1	2.5.1
5.6	2.6
5.7	7

---

表 2 SunOS と Solaris OS のバージョンの相関関係 (続き)

SunOS のバージョン	Solaris OS のバージョン
5.8	8
5.9	9
5.10	10

## サポートされる SMS のバージョン

System Management Services (SMS) を使用して Sun Fire ハイエンドシステム上のシステムコントローラ (SC) を稼働させている場合は、すべての Solaris 8 および Solaris 9 OS バージョンで SMS バージョン 1.4、1.4.1、および 1.5 と Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの併用がサポートされます。Solaris 10 OS 上で Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアによりサポートされる SMS のバージョンはありません。

注 – Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアに関しては、Solaris 10 OS はドメインでのみ使用可能で、システムコントローラ (SC) では使用できません。

## Solaris Security Toolkit 4.2 で既知の制限事項

この節では、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの既知の制限事項について説明します。

- Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアは、システムアカウントを無効にしても機能は維持されますが (終了スクリプト `disable-system-accounts.fin` を参照)、無効になったアカウントに対して試みられたログインを記録するようにシステムを変更することはできません。

---

## 一般的な問題

この節では、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアに関連する一般的な問題について説明します。

### パッケージ形式でのみ配布されるリリース

Solaris Security Toolkit 4.2 リリースはパッケージ形式でのみ配布されます。

### SUNWjass および JASScustm パッケージが再配置可能になる

Solaris Security Toolkit 4.2 のリリースでは、SUNWjass および JASScustm パッケージが再配置可能になり、Sun のパッケージ標準と整合性が取られるようになりました。pkgadd (1M) -R コマンドを使用して、これらのパッケージを再配置できます。

### Solaris Security Toolkit と CTRL-C キー操作

Solaris Security Toolkit によるセキュリティー強化操作と undo 操作中に CTRL-C キー操作を行うと、システムが矛盾した状態になる可能性があります。本来ならば、セキュリティー強化操作を中断するのではなく、セキュリティー強化操作が完了してから、次に undo 操作が実行されなければなりません。CTRL-C キー操作は、エラー処理や、ツールキットによる処理の中断に使用しないでください。セキュリティー強化操作や undo 操作は、前の操作が完全に終了してから再実行してください。

---

## Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアのバグ

この節では、発生する可能性のあるバグについて説明します。これらのバグは Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアではまだ修正されていません。

## NIS を使用しているときに、再起動を複数回行うと監査エラーが生じる場合がある (Bug ID 6222181)

デフォルトで、`secure.driver` では `rpcbind` が無効になっています。NIS を使用している場合、システムを再起動すると、`inetd` により正常に起動されたすべてのサービスが非初期化状態のままになり、レガシーサービスが機能しないことがあります。これにより、Solaris Security Toolkit では、`inetd` によって起動されたサービスにおいて、再起動の前後で監査結果の不一致が生じます。

このバグは、Solaris 10 OS の Bug ID 6223370 により修正される予定です。このバグの詳細については、「Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアに影響するバグ」を参照してください。

回避策：

- NIS を使用する必要がある場合は、`rpcbind` を有効にして再起動します。『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 1 章を参照してください。
- NIS を使用する必要がない場合は、NIS を無効にします。NIS を無効にする方法については、Solaris 10 OS のネームサービスに関するマニュアルを参照してください。

## 再起動を複数回行うと `svcs` が初期化されず、`nddconfig` で監査が失敗する (Bug ID 6284872)

強化後に複数回再起動を行うと `svcs` が初期化されず、監査が `nddconfig` で失敗します。つまり、システムが複数回再起動したあと、`nddconfig` 監査にはゼロエラーが含まれません。

問題点は、`rpcbind` が無効であり、システムが NIS を使用するよう構成されていると、`milestone/name-services` がオンライン状態にならないことにあります。このため、`/etc/rc2.d (svc:/milestone/multi-user:default)` が動作せず、これにより `nddconfig` も動作しません。

このバグは、Solaris 10 OS の Bug ID 6223370 により修正される予定です。

回避策：

- NIS を使用する必要がある場合は、`rpcbind` を有効にして再起動します。『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 1 章を参照してください。
- NIS を使用する必要がない場合は、NIS を無効にします。NIS を無効にする方法については、Solaris 10 OS のネームサービスに関するマニュアルを参照してください。

---

# Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェア に影響するバグ

この節では、発生する可能性のあるバグについて説明します。これらのバグは、Solaris Security Toolkit に影響するその他のソフトウェアで修正されていません。

## ip6\_send\_redirects のパラメータが監査によって異なる場合がある (Bug ID 6222001)

この Solaris 10 OS バグは、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの動作に影響する可能性があります。同じであるはずの ip6\_send\_redirects のパラメータが監査によって異なる場合があります。たとえば、強化されていないシステムを監査するとします (Audit #1)。続いてシステムを強化し、再起動し、強化を元に戻して、再起動します。システムを再度監査します (Audit #2)。

タイムスタンプを除いて、同じ監査結果が表示されると予想されます。しかし、最初の監査と第 2 の監査の間で、niddconfig ファイルの ip6\_send\_redirects パラメータが異なる場合があります。最初の監査では、パラメータが 0 ではないためチェックに失敗したとメッセージは報告します。第 2 の監査では、パラメータが 0 であり、これが正しい応答であるためチェックが成功したとメッセージは報告します。

回避策：特にありません。

## /etc/motd は揮発性ファイルとしてインストールする必要がある (Bug ID 6222495)

この Solaris 10 OS のバグは、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの動作に影響する可能性があります。/etc/motd ファイルは、ファイルタイプ f で SUNWcsr パッケージにより配布されます。Solaris Security Toolkit 4.2 のドライバがこのファイルを置き換えるため、ゾーンとゾーン内のパッケージをインストールする際にエラーと警告が発生する可能性があります。

回避策：

次のいずれかの方法を実行します。

- このファイルがインストールされないように JASS\_FILES リストからファイルを削除します。
- ファイルタイプを v に変更してこのエラーを解消します。

## svc.startd が optional\_all のエッジケースを見つけることができない (Bug ID 6223370)

rpcbind を無効にして再起動した場合、milestone/name-services がオンラインにはならないため、inetd およびその他のサービスがオンラインにならない場合があります。いくつかの点で、この Solaris 10 OS のバグは、Solaris Security Toolkit 4.2 ソフトウェアの動作に影響する可能性があります。Bug ID 6284872 および Bug ID 6222181 の説明を参照してください。

回避策：

- NIS を使用する必要がある場合は、rpcbind を有効にして再起動します。『Solaris Security Toolkit 4.2 リファレンスマニュアル』の第 1 章を参照してください。
- NIS を使用する必要がない場合は、NIS を無効にします。NIS を無効にする方法については、Solaris 10 OS のネームサービスに関するマニュアルを参照してください。